

まるいころ

■ 楽曲データ

歌詞：大沢みゆき 作詞

楽曲：森正隆 作曲

発表：京都女子大学女声合唱団 1987年

初演：—

初出：『佛教音楽』第17号 仏教音楽研究所 1988年

管理番号：M1606

■ 創作の経緯

歌詞は、仏教音楽研究所の第4回創作募集（1979年度）において発表され、同所機関誌『佛教音楽』第15号（1987年）に巻頭詩として掲載。同年10月、京都女子大学女声合唱団のために、女声三部合唱として作曲される。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第6巻収録

底資料：『浄土の音楽集成 仏教讃歌6 明日への讃歌 楽譜』 同朋社出版
1994年

比較資料：—

校訂の詳細：特になし

■ 解説

《まるいころ》は、京都女子大学女声合唱団によって発表され、同合唱団の演奏旅行や本願寺の御堂演奏会などを通じて、全国へ広まった仏教讃歌です。ほんのりとした雰囲気、聞く人を温かく包みます。

◆ 歌詞について

作詞者の大沢みゆき（生年不詳、作詞当時は兵庫県在住）は、人と自然とのつながり、人と人とのつながりを、そっと両手で包むような、やさしい言葉を紡ぎだしています。

曲名にもなっている「まるいころ」という言葉からは、み教えを依りどころとして、いのちを慈しみながら生きていこうとする人生観が伝わってきます。人びとの心がギスギスして、言葉にもトゲのある言葉づかいがされやすい今日、忘れてはならない視点だと思えます。

◆ 曲について

作曲は、森正隆（1925～、大阪教区阿倍野組蓮光寺前住職）。龍谷大学在学中、同大学男声合唱団で活動し、1946（昭和21）年の龍谷混声合唱団（龍谷大学男声合唱団と京都女子大学女声合唱団による混声合唱団）発足に尽力しました。その後、自坊で合唱団「コール・ルンビニー」を主宰し、仏教讃歌の演奏や普及にあたっています。

仏教讃歌の作曲も多く行い、《生きる》《アソカの園》《仏教壮年の歌》などの作品がよく知られています。森は、作曲する前に詞を何度も何度も読んでイメージをふくらませる、と語っており、この作品もやさしい言葉づかいに寄り添った、さわやかさが特徴となっています。

◆歌い方について

- ①楽譜の冒頭に「さわやかに」との指示があります。力まずに、ほのぼのとした気分で歌いましょう。
- ②1拍目が8分休符という小節が多いので、休符のたびに音楽の流れがとぎれないよう、気を付けましょう。特に、フレーズの途中にある8分休符（6・10・17小節目）は、長くとりすぎず、言葉を切るようなつもりで処理しましょう。
- ③歌詞を文節単位でとらえると、多くの場合、文節の最後の文字に2分音符や付点2分音符などの長い音符が当てられています。音程が下がらないように、気を付けましょう。
- ④7・11小節目の3連符は、リズムよく歌いましょう。連符の最初の音を大切に。
- ⑤13・14小節目、歌詞の繰り返しに合わせて、だんだんとクレッシェンド（次第に強く）していきましょう。
- ⑥15小節目は音の動きが難しいので、丁寧に練習してください。

◆楽譜・音源について

オリジナルは、女声三部合唱です。そのほか、二部合唱版が『讃歌集 二部合唱』第8巻に掲載されています。

音源は、CD『ほほえみとともに』に収録されています。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者 福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 46（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第173号収録）を加筆・修正のうえ、転載。